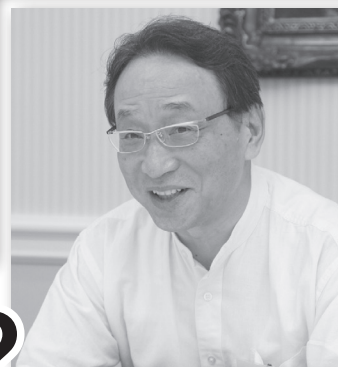


学校と
経営者の交流活動
推進委員会
主催



勉強するのは何のため？ 働くってどういうこと？

中学生らが活発に グループ・ディスカッション！

主に中学生・高校生を対象とした出張授業や、教員研修会、保護者対象の懇談会等で講演を行うなど、学校現場や教育関係者との活発な交流活動を展開する「学校と経営者の交流活動推進委員会」は、9月3日、日本工業倶楽部において第5回教育フォーラムを開催した。当日は中学生、教員、保護者、教育関係者など132名が出席した。開会挨拶では、杉江和男委員長（DIC 取締役社長執行役員）より「なぜ勉強するのか、働くとはどういうことなのか？ 日ごろから疑問に思っていることを、ぜひ参加者の皆さんでディスカッションしてください。そして、今後の人生に大いに役立ててください」と中学生に励ましの言葉がかけられた。

フォーラムの第1部では橘・フクシマ・咲江副代表幹事（G&S Global Advisors Inc. 取締役社長）の基調講演が行われた。第2部では、生徒、教員、保護者別に14グループに分かれ、グループ・ディスカッションが行われた。生徒をはじめ参加者は、積極的に発言し、どのグループも活気にあふれていた。

（基調講演・ディスカッションの一部を紹介）

これからのグローバル社会で 求められる力とは

～中学生の君たちへ期待すること～

●講師

橘・フクシマ・咲江 副代表幹事 (G&S Global Advisors Inc. 取締役社長)

グローバル・リーダーとして活躍するには何が必要か。橘・フクシマ・咲江副代表幹事はこれまでの人財市場におけるビジネス経験から、人財をめぐる環境の変化と、将来のグローバル・リーダーに必要な要件を中学生に向けて語った。

欧米型+アジア型の リーダーシップが必要

人は全ての社会の基本であり、企業においても同様です。ですから、私は長年「人材」を財産として見る「人財」と表現してきました。この20年間の経済とグローバルに求められる人財を振り返ると、二つの山と谷がありました。一回目の山は、1990年代後半のIT革命によるドットコム・バブルです。2000年のバブル崩壊で人財市場も縮小、その後回復しましたが、08年の金融危機で再度半減しました。この二つの山には大きな違いがあります。一つ目の成長は欧米でしたが、二つ目はインド・中国といったアジアの新興国でした。

経済の中心も、必要とされる人財も、アジアに移りつつある、というのが現在の状況です。

この変化によって、リーダーの要件も変わってきました。これからはアジア型と欧米型を合わせたハイブリッドなリーダーシップが必要になると予測できます。欧米型は数字や戦略を強調しますが、アジア型は人間関係や現場を重要視します。これは日本にとって有利なはずですが、しかし、残念ながら日本は今、内向きになっています。その一例がアメリカへの日本人留学生の減少です。一方で中国人、韓国人、インド人の留学生は増えました。さらに英語力にも差がついています。またマネジメント経験も同年齢では韓国学生

の方がいます。これらの国に比べて世界の人財市場での日本の競争力は10年遅れてしまったと言えるでしょう。

最も大切なダイバーシティ という考え方

グローバル・リーダーとなるための要件は、国境を越えて活躍できることやどんな未経験の問題でも解決できる創造的問題解決能力を持っていることなどがあります。そして、特に知ってほしいのが、多様性＝ダイバーシティ対応力の大切さです。これは、国籍、人種、性別、年齢、宗教などの異なる相手の立場に立って考えるということです。共通点もありますが、違いもたくさんあります。その違いを理解した

プログラム

■第1部 基調講演

これからのグローバル社会で
求められる力とは
～中学生の君たちへ期待すること～

講師:

橘・フクシマ・咲江 副代表幹事
(G&S Global Advisors Inc. 取締役社長)

■第2部 グループ・ディスカッション

●生徒グループ

テーマ:「勉強するのは何のため？
働くってどういうこと？」

●教員／保護者グループ

テーマ:「これからの社会で求められる力
と教育のあり方」

参加講師

(50音順)

【生徒グループ・ディスカッション担当】

- 岩下 正 (ローン・スター・ジャパン・アクイジションズ 会長)
- 大塚 良彦 (大塚産業クリエイツ 取締役社長)
- 島田 俊夫 (シーエーシー 取締役会長)
- ◎杉江 和男 (DIC 取締役社長執行役員)
- 出口 恭子 (日本ストライカー 取締役グローバルマーケティングバイスプレジデント)
- 廣瀬 駒雄 (オーエム通商アクト 取締役社長)
- 吉村 幸雄 (シティグループ・ジャパン・ホールディングス 執行役員 ガバメント・アフェアーズ担当)

【教員グループ・ディスカッション担当】

- 遠藤 勝裕 (日本証券代行 顧問)
- 高坂 節三 (日本漢字能力検定協会 理事長)
- 小林 恵智 (職業資格取得支援協会 理事長)
- 同前 雅弘 (大和日英基金 副理事長)
- 林 明夫 (開倫塾 取締役社長)

【保護者グループ・ディスカッション担当】

- 藤田 實 (オグルヴィ・アンド・メイザー・ジャパン 取締役副会長)
- 四方 ゆかり (グラクソ・スミスクライン 取締役)

※◎は学校と経営者の交流活動推進委員会 委員長、○は副委員長

上で、人間として尊重、尊敬することです。私が、グローバルな環境の中で学んだことは、「ドイツ人だから」「女性だから」などと見るのではなく、国籍や性別もその人個人の個性の一部として見ることの重要性です。ダイバーシティに対応するためにも、予測不能な危機を乗り越えるための危機管理能力、そして創造的問題解決能力、コミュニケーション能力が必要なのです。こういう人がグローバルなプロフェッショナルのチェンジ・エージェント＝変革者となるのです。

また、「外柔内剛」でいてほしいと思います。例えば海外の人から素晴らし

いと評価された日本人の良いところは内剛。それは信念として持ちながら、しかし外の多様な価値観には柔軟にしたたかに対応することが大事ということです。

新しいことを学んで成長する 楽しみを持とう！

私が見た成功者に共通する特性は、自分のしたことに責任を持ち、失敗から学んでいることです。成功の道は一人ひとり違うのでマニュアルはありません。つまりキャリアは自分で作るものです。そして何をするにも無駄はないので、何でもやってみる。でき



ないと思う前に、どうすればできるかを考えてほしい。また人と競争するよりも、昨日の自分と競争すること。

私の一番好きな言葉は「ローマは一日にしてならず」。昨日より今日、明日より明後日、毎日新しいことを学んで成長する楽しみを、私は持ち続けたと思っています。皆さんには世界を舞台にグローバルなリーダーとして活躍することを期待しています。

生徒との質疑応答

Q 一人ひとり個人として見なければいけないと思ったきっかけは、何かありましたか。

A 私も以前は「〇〇人はこういうタイプ」というイメージがあり、何度説明しても厳しい質問を繰り返す外国人に対して、「だから〇〇人は」と思っていました。しかし、ある時、食事をしながら深く話してみると、私ととてもよく似た考えや価値観を持っていることが分かりました。〇〇人はその人の一部にすぎないと気付いたのです。それ以来、

誰とでも個人として付き合えるようになりました。

Q グローバルなプロフェッショナルになるには、プロスポーツ選手のように生まれつきの才能が必要ですか、それとも努力次第でなれますか。

A 一流のスポーツ選手を見ると生まれながらの能力は確かにあると思います。でも、努力である程度開発できるのが個人的資質である論理性や発言能力です。そこに仕事での経験で得られる能力を加えていけばプロフェッショナル

になることも可能です。

Q 「ローマは一日にしてならず」という言葉はいつどこで出会ったのですか。

A 小学生のとき本で読みました。でもそのころは、あまり勉強しなくて、怠けることの言い訳に使っていましたね(笑)。社会人になって、一日一日の努力の積み重ねが成果につながるということが分かって、日々の努力がとても大切だと思うようになりました。それからは、この言葉を信念にしています。

感想 (アンケートより)

生徒：今、学校でも必要とされている「相手を理解する力」が社会に出たときにも必要とされていると分かりました。将来、いろんな人と仕事をするところがあると思いますが、人種や性別などを意識することなく、お互い理解して積極的に仕事をしたいと思いました。「ローマは一日にしてならず」という言葉通り、毎日いろんなことを吸収して、学ぶようにしようと思いました。

生徒：今まで「できない」理由をいつも先に考えていました。しかし、今日のお話を聞いて、「どうやるか」という見方にも注目してみようと思いました。このことを将来に活かそうと思います。

生徒：一番心に残ったのは、グローバル・リーダーになるには何でもやってみる、無駄な経験はないという言葉でし

た。最近、何のために勉強するのだろうと思うことが時々ありました。しかし、今日の講演を聞いて、勉強をして無駄なことはないと思いました。勉強をして、いろいろな経験をすることが、将来の自分をつくっていくのではないかと思います。

教員：人を「個人」として見ることの重要性を教えていただきました。「人財」の言葉は印象的でした。子どもたちを「人財」として育てていきたいと思います。また、今後も外部人財の活用をキャリア教育の一つとしてカリキュラムに位置付けたいと思います。

保護者：共感することがたくさんありました。子どもたちにとって視野を広げるような内容で、また参加したいと思います。

生徒グループ

「勉強するのは何のため？ 働くってどういうこと？」

（ 仕事は喜びを得るためのもの ）

講師：大塚良彦 大塚産業クリエイツ 取締役社長
学校と経営者の交流活動推進委員会 副委員長



仕事は人生の喜び

「グラスに半分飲んだジュースがある。これを見て、どう思う？」

大塚良彦氏が尋ねた。「まだ半分残っている」。そう答えた生徒に、大塚氏はうなずいた。「半分しかないではなく、半分もあるというプラスの考え方で物事を考えることが大事だ」。そして大塚氏は自らが経営する会社で、「1%でも可能性があるのなら、そのことだけ

を話し合おう。他人の発言には“NO”と言わず、さらに発展させよう」と呼び掛け、不可能と思われたプロジェクトを成功させた例を語った。

さらに「福沢心訓」を取り上げ、仕事は生きる上で大切なことだと説いた。「生きることは最終的に心の喜びを得ること。仕事はその手段」。さらに「経済とは中国の言葉で“経世済民”^{けいせいさいみん}」といい、世の中を治め人々を救うこと。金儲けということではなく、人助けをすること」と経済の真意を伝えた。

「限界」をつくらないで

中学生にとって今の仕事は勉強だ。大塚氏は「目標を立てたら必ず行動計画を作って習慣化する。すると正しい習慣が人格を変え、人生を変える。水面下での努力が成功の鍵。まさに『ローマは一日にしてならず』だ」と語

りかけた。

努力を続けると、時に壁にぶつかることもある。だが、「限界は自らつくるもの」と「ノミの限界」を例に、生徒たちに問うた。制限をかけて跳躍能力を半分にしたノミに、元々持っていた1m飛ぶ能力を発揮させるにはどうしたらいいか？「横に、1m飛べるノミを持ってくれば」と生徒が答えた。この例から「元気な友だちの横にいれば、自分も同じようにできるのではと考え、実行し、壁を打ち破れるだろう」と、自分が気付いていない自身の持つ能力を発揮するよう説いた。

生徒は「仕事は自分や人のためになるかもしれないし、安らぎになるかもしれない。だから仕事は大事なんだ」「勉強は目的ではなくて、目的を知るためだと分かった」など、仕事や勉強の意味を考えることができたようだ。

生徒の感想

■考えることの大切さが分かり、すぐ役に立ちました。今まで、勉強はただ覚えるだけだったが、これからはなぜそうなるのかなど、考えながら勉強したいと思いました。働くことについても、より理解を深めることができ良かったです。他校の人と話す機会があったことも良

い刺激になりました。後輩にも参加を勧めたいです。

■今回の話し合いで、働くということがどうい

うことなのか、いかに大切なものなのかが分かったので、将来、仕事を決めるときなどの参考になりました。また、人に信頼されること、人の立場に立って物事を考えるということが大切だと分かり、役に立ちました。

■勉強について、今までは何でしなくてはならないのかと思っていただけ、勉強は目標達成のための「手段」だと分かって納得できた。また、先生は「働く」ということだけでなく、人と人とのつながり、コミュニケーションの大切さも教えてくださった。また、みんなで一つのことについていろんなことを言い合って、いろんな考え方やものの見方があると分かり、とても有意義な時間になりました。



生徒グループ

「勉強するのは何のため？ 働くってどういうこと？」

（何にでも積極的にトライしよう！）

講師：島田俊夫 シーエーシー 取締役会長

具体的な目標を持とう

島田俊夫氏が中学生時代を過ごした1970年代は、真面目に働けば誰もが成功すると考えられていた時代。しかし、今の中学生が社会に出るころはこれまでとは価値観も考え方もまったく異なっていることが予想される。「そういう社会で勉強するとは、働くとはどういうことかを考えたい」と、島田氏はまず



生徒たちにこう問いかけた。「試験前になると、なぜ普段より勉強するのか」。「高校進学を考えると、中学の成績が良い方がいい」「勉強の成果をテストで出したいから」「知識がないと高校に入ってから授業についていけない」などと答える生徒たち。「大事なのは」と島田氏が続けた。「目標があること。必ず結果を出したいという目標を頭に浮かべたときに勉強する。スポーツでも試合に勝ちたいという目標があるから、普段より練習する。具体的な目標を持つことが重要だ」。

異文化に触れ、違いを知る

今は学校のカリキュラムで初めて職場体験をする中学生も多い。生徒たちもそこで実際に働く人にじかに触れ、働くことの大変さを実感しているようだ。島田氏は「仕事に限らず、やって

みないと分からないことはたくさんある。だから、考える前に何でも手を挙げて経験すること。そして家の手伝いや学校の当番も積極的に」と経験を重ねよう語った。また同時に、何を行うにも時間を設定し、時間通りに終えるための段取りや要領を考えてみることを勧めた。

さらに、将来は文化や習慣などが異なる外国人と共に仕事をするようになる。「できるだけ機会を見つけて日本人以外の人と接触しよう。そこで、違う行動や習慣を『おかしい』『正しくない』というのは危険。私たちとは違うということを肌で感じ、尊重することが重要」と説いた。

生徒らは「目標を持つ大切さがよく分かった」「自分の苦手なことにも取り組んでみたい」など、チャレンジすることの大切さを学んだ。

生徒の感想

■目標を決めてさまざまな努力をしていくことが大切だという話が役に立ちました。これからは、たくさんの目標を立てて、一つひとつの目標に向かって努力を重ねていきたいです。それから、今まで自分は高校を偏差値だけで決めようとしていました。でも自分のやりたいことをどんどんやっていこうという気持ちになり、見方が変わりました。

■今まで考えていた、好きなことだけに取り組もうということは、視野が狭いということが分かりました。選択しないで“全部やってみる”ということが大切だと分かり、将来を考える上で役に立ちました。こんなディスカッションは初めてなので緊張しましたが、人それぞれの考

え方が聞けて、とても良い経験になりました。

■ディスカッションの途中で、話の内容が分からないところがあり意見が持てませんでした。講師の方が「『分かりません』と言うことも意見だよ」と素晴らしい話をしてくれました。今後、自分の中で、何かが変わるかもしれません。まだ、将来の夢は見つかりませんが、目の前のことを一つひとつクリアしていきたいと思います。



生徒グループ

「勉強するのは何のため？ 働くってどういうこと？」

（みんなの夢をみんなで語り合おう）

講師：出口恭子 日本ストライカー 取締役グローバルマーケティングバイスプレジデント
学校と経営者の交流活動推進委員会 副委員長

あせらずに夢を見つめよう

将来の夢について、中学生はそれぞれに思い悩んでいる。出口恭子氏は「お互いに考えていることを話していこう」と語りかけた。

進路を考えると不安だという生徒は「一度決めた夢に向かって走り出したら、後戻りできないのではないか」と胸の内を明かす。そんな彼女に対して、生徒の一人は「他のことをしようと思ったから出直せばいい。無駄な時間はない」と。また作家志望の生徒は「作家はどちらかというと文系。でも理系でも文章力は必要だから、どんな仕事にも活かせると思う」と意見を述べた。生徒それぞれの意見を聞いた出口氏は「私もそうだった」とうなずいた。「幸せだと自信を持って言える仕事に巡り合えたのは40歳を過ぎてから。でも、それまでさまざまな仕事を経験し、いろいろな人



と知り合ったから今の仕事がある」。

だが、将来のことを決めるのはどの時点が良いのかという疑問も出た。出口氏は「それにこだわる必要はない。勉強でも何でも今の一瞬一瞬を大切に、楽しいと思える時間に変えて、それを積み重ねていくうちに、これだと思えることが出てくるだろう」とアドバイスした。

「限界」をつくらないで

生徒たちは、思い入れに差はあるに

せよ、それぞれに夢を持っている。出口氏は、どうしたら夢に近づけるか、お互いにアイデアを出し合おうと声をかけた。トリマー志望だという生徒には、「町で飼い主と散歩している犬を見かけたら、どんなカットが似合うか、想像すると楽しい」「ペットショップのトリマーさんに、仕事の話を聞いてみたらどうだろう」。作家志望の生徒には、「好きな作家の小説を何冊も読んで、共通する言葉を探してみたら」「友達に自分が書いた文章を読んでもらい、感想を聞いてみる」。マーケティング・プランナー志望の生徒には、「気になったキャッチコピーの雑誌広告の切り抜きをクリッピングする」「プロが書いたものと自分のものと比較してみるといいかも」と、お互いの夢をかなえるためのアイデアが次々と出された。夢を語り合うことで、夢に近づくための一歩が見えたようだ。

生徒の感想

■夢についてみんなで話し合うことができて、面白かったです。目指す夢というのは、いくら変えてもいいもので、それまでの努力も時間も決して無駄になることはない、ということに行き着いた時、私は少しほっとしました。今持っている夢にどんな努力をすればいいか、みんなのアイデアが役に立ちました。

■進路については、不安もあったけど、たとえ将来なりたい職業が変わっても、今やっていることは無駄にはならない、それまでの経験を次の夢に活かすという前向きな考えがあることが分かって良かったです。夢に近づくために年末までにすることを決めました。私は、小説を

書いて友達に見せて感想を聞きたいと思います。

■最初は、どんなことを話すのか緊張していましたが、自分の悩みや不安に思っていることなどを素直に話せて良かったです。他の人の話を聞いたり、違った意見やアドバイスをもらったりして「よし、がんばろう」と思いました。有意義な時間を過ごすことができました。将来の夢や進路に向かって、一步一步進んでいこうと思いました。



教員(副校長)グループ

「これからの社会で求められる力と教育のあり方」

(教育改革、学校現場の権限強化を!)

講師:遠藤勝裕 日本証券代行 顧問
学校と経営者の交流活動推進委員会 副委員長

時代によって変わる必要な人材像

「社会が求めている人材像は往々にして誤解されている」と遠藤勝裕氏は問題提起した。「本来、教育は家庭から始まり、幼・小・中・高・大、さらには大学院、そして社会に出て、それがまた家庭に還元するという循環だったはず。ところが、いつの間にか、いい会社に入れば子どもは幸せ、だからいい大学へ、いい高校へと、逆回りの発想になってしまった。これを元に戻す必要がある」と主張した。

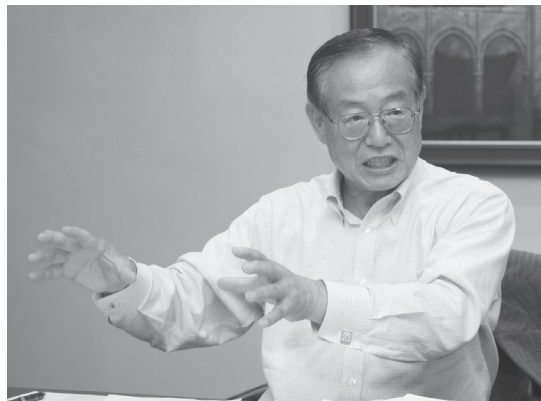
今の時代は「ITにコミュニケーションを加えた『ICT化』と『少子・高齢化』『国際化』『温暖化』の四つの『化』にしっかりと対応できる人材が求められる」とし、「ネットで情報が世界同時に伝わり国際的水平分業の進展をもたらした。これから重要なことは世界中から優秀な若者が日本にやってくる

ということ。そういう社会で競争し活躍できることが求められる」。さらに「少子・高齢化の一つの課題として、若者にハングリー精神がないこと」など議論のポイントを示した。

子どもは最大のステークホルダー

遠藤氏は日本銀行行員時代の新卒採用でのエピソードとして「日銀には一流大学から優秀な人材がたくさん応募してくる。その中から厳選して採用するが、それでも、再教育が必要なケースも出てくる。面接で唯一分からないのは“心の強さ”」と語った。副校長らも「若い教師は厳しくすると潰れてしまう」「公立学校では教師に辞めると言えない」「今の状況を正そうとすると反発される」「教師もモチベーションが下がっている」など教育現場が抱える問題を訴えた。

遠藤氏は「学校における最大のステークホルダーは子どもである。これを理解できなかったら教師を辞めていただくしかない」と語り、「現場のモチベーションを上げるためにも人事権を教育委員会から校長に移すべき」と主張した。また、「子どもも教師も心を強くして、壁を乗り越えることが必要である。それができないと日本社会全体が沈み込んでしまう」と、企業側が抱く危機感を示した。



教員(副校長)の感想

■経済界(人)が、学校教育に対する危機感を抱いていることがよく分かった。また、そのことに対し具体的な提言など、考えを伺え、大変参考になった。社会が求める人間像、人材像の話、社会を取り巻く四つのキーワードについても役立った。学校における教員に対する厳しさ



を求めることは、すべて子どものためであり、子どもの目線に立つ必要性を改めて認識した。

■人材育成について、どのようにしていくか、また子どもにどのような人生を送らせるかをしっかり見つめさせ、心の教育をし、強い子を育てることなどを実践していきたい。子ども一人ひとりの能力を見直し、保護者と共に子どもに合った力を付けてあげるようにしなければいけない。そのためには、教員の意識を変えることも必要である。教員としての理念を高め、責任を持って仕事に当たらねばならない。特に、若手には、教員としての意識を高めるよう指導していこうと思った。各校や企業の人事のことなども分かり良かった。

保護者グループ

「これからの社会で求められる力と教育のあり方」

（家庭と学校と社会との三位一体の教育を）

講師：藤田 實 オグルヴィー・アンド・メイザー・ジャパン 取締役副会長

日本人かつ国際人という
バランス感覚を

藤田氏は「社会人には三つのルールがある」と、経営学者ピーター・ドラッカーの言葉を紹介した。「時間を守る、マナーを良くする、そしてあいさつ。組織で生きるにはこの三つが大切である。逆にこれさえあれば、世界中どこでもチャンスをつかむことができる」。これは今も昔も変わらないグローバル社会に必要な基本ルールだと語った。

さらに、現代日本の寵児とも言える作家の村上龍氏や幻冬舎の見城徹社長、サイバーエージェントの藤田晋社長らが唱えるGNO（義理・人情・恩返し）の大切さを強調。これは、今では失われたかと危惧される昔ながらの日本の道徳観でもある。東日本大震災では、日本人自身が日本人の良さに気付き始めた



こともあり、今後日本が立ち上がるための必須要素であると語る。加えて、グローバル化に対応しなければならないことから、「国際共通語としての英語」がより重要になるとし、日本人かつ国際人であることのバランス感覚を大事にすべきとの考えを示した。

教育の原点は
家庭・学校・社会

参加した保護者から「中学生にもキャリア教育が行われているが、学校はどうしても『いい就職にはいい大学』と

いう図式から抜け出せない」と社会と学校側とのギャップを指摘する声も上がった。藤田氏は「確かに中学校の校長先生でさえ、生徒に『立派な企業に就職してください』と言うことがある。しかし大企業だっていつ困難と直面するか分からない。そのとき、会社の名前ではなく、個人の能力・信用力で仕事をしている人しか生き残れない。そんな力を身に付けられる教育をしてほしい」と訴えた。

また、「PTA活動に参加していただけない保護者とはなかなか話ができない」と保護者と学校とのつながりを危惧する声もあった。藤田氏は教師と保護者との懇談は必要不可欠だったというスイスの学校での経験から、「家庭と学校と社会との三位一体でなければ教育は成り立たない」と主張、いったん崩れた教育のあり方を一から見直すことの重要性を語った。

保護者の
感想

■家庭と学校しか知らない主婦にとって、社会の第一戦で活躍されている方が、「社会と学校と家庭の三位



一体がこれからの日本には大切」とおっしゃったことが、とてもうれしく思いました。何のために勉強するの？と聞かれたら、「カンボジアの子どもたちが食べるために必死に生活していることを話す」というお話には私自身考えさせられました。世界に目を向けて親も何をすべきかを考えるべきだと思いました。そのほか、グローバルな目線で世界を見るお話がとても参考になりました。

■義理と人情と恩返しのGNOが、社会人として大切なことであると改めて思いました。日本の素晴らしさを再認識するとともに、これからもっと頑張らなければならないと感じた。いろいろな話を聞くことができ、有意義な時間を過ごすことができました。

グループ・ディスカッション 講師の感想

■ ■ ■

生徒グループ

岩下 正 ●ローン・スター・ジャパン・アクイジションズ会長
学校と経営者の交流活動推進委員会 副委員長



今回フォーラムに参加した生徒には、意識の高さを感じた。中学生が世に出るまでに学ぶべきこと、身に付けることはたくさんある。日々、新しいことを吸収し、新たな問題にぶつかって一つひとつ積み重ねてほしい。

生徒グループ

杉江 和男 ●DIC 取締役社長執行役員
学校と経営者の交流活動推進委員会 委員長



将来を不安に思い、勉強は暗記することと思っている中学生たちと、経験に基づき社会の仕組みや勉強がどのように役立つかを話し合えたことで、きっと彼らにとって自立への道を歩むきっかけになると信じている。

生徒グループ

廣瀬 駒雄 ●オーエム通商アクト 取締役社長



グローバル経済の中での日本の将来像を中学生に分かってほしかった。仕事の意味は理解してもらえたようだ。また、中学生同士もコミュニケーションを求めている、会話が弾んだのは良かった。

生徒グループ

吉村 幸雄 ●シティグループ・ジャパン・ホールディングス執行役員ガバメント・アフェアーズ担当
学校と経営者の交流活動推進委員会 副委員長



意欲のある生徒がそろっていて、問題意識もはっきりしていた。意味のある双方向の議論ができた。自分のキャリアを築くとはどういうことか、その意義、そして社会が変わる必要があることを伝えた。

教員グループ

小林 恵智 ●職業資格取得支援協会 理事長
学校と経営者の交流活動推進委員会 副委員長



社会は常に変化し、人は同じでない。教員には生徒一人ひとりに目配りをしてほしい。少人数制で自然に議論できたと思う。新任の教員は、思いと行動と学校のルールとの間で、板挟みになっていることが分かった。

教員(校長)グループ

同前 雅弘 ●大和日英基金 副理事長



学校は知的資産の宝庫であることを認識した。変化の時代に対する教育について、個々の生徒の天性に気付き、生きた知識と英知を結び付ける教育指導のあり方への関心が高かった。
(校長の皆さまの改革への意欲に敬意)

教員グループ

林 明夫 ●開倫塾 取締役社長



一生勉強、一生青春。学校や社会で生涯にわたって学ぶことの意味とは何か。社会に出てからも役に立つ勉強の仕方をどう伝え、自覚を促すかなど、熱い思いにあふれる議論が続いた。

教員グループ

高坂 節三 ●日本漢字能力検定協会 理事長



グローバル化の時代、単純労働者の国内での就業機会は少なくなる。卒業者は個性豊かな人が求められる。これをもとに、少人数の参加教員間で互いに悩みを話し合う機会がくれたことが良かった。

保護者グループ

四方 ゆかり ●グラクソ・スミスクライン 取締役
学校と経営者の交流活動推進委員会 副委員長



PTA および元 PTA 関係者が多数を占めたので、PTA の立場および子を持つ保護者としての二つの立場での討論となった。主に家庭でどんな教育が重要か、学校に何を期待するかなど、活発な意見が交わされた。